

チャペル週報

神の霊がわたしを造り
全能者の息吹がわたしに命を与えたのだ。
(ヨブ記 33:4)



秋季宗教運動特集号
2006.10.16 ~ 10.20 No.16
関西学院宗教センター

チャペル・スケジュール

時間 10:35 ~ 11:05 場所 各学部チャペル

10月16日(月) 秋季大学キリスト教週間
西宮上ヶ原キャンパス学生によるチャペル
ランバスチャペルアワー 於：中央講堂

10月17日(火) 西宮上ヶ原キャンパス学部合同チャペル
宣教師によるチャペル
メッセージ：David Wider
於：中央講堂

総 今 泉 信 宏 (宗教主事)

10月18日(水) 西宮上ヶ原キャンパス学部合同チャペル
インドネシア交流セミナーより
メッセージ：参加学生
於：中央講堂
理 「身代わりの死」北 村 泰 彦 (理工学部教授)
総 中 條 道 雄 (総合政策学部教授)

10月19日(木) 秋季宗教運動大学合同チャペル (10:20 ~ 11:20)
西宮上ヶ原キャンパス
メッセージ：山本圭子 (文学部助教授)
於：中央講堂

神戸三田キャンパス
メッセージ：磯貝暁成 (初等部(校長)予定者)
於： 号館201号教室

10月20日(金) 秋季宗教運動大学合同チャペル (10:20 ~ 11:20)
西宮上ヶ原キャンパス
メッセージ：磯貝暁成 (初等部(校長)予定者)
於：中央講堂

神戸三田キャンパス
メッセージ：松木真一 (宗教主事)
於：理工学部チャペル

ランバス早天祈祷会 午前8:20~8:40 於 ランバス記念礼拝堂
10月19日(木) 秋季宗教運動のために 辻 学
10月20日(金) 秋季宗教運動のために 岡田 弥生
総合政策学部早天祈祷会 毎木曜日 午前8:40~ 於 宗教主事室

秋季大学キリスト教週間への招き

田 淵 結

もうかなり前のある新聞の記事で、その当時、世界一長生きができ、世界一平和で、お金持ちの国はどこか、というものがありませんでした。みなさんはどう思いますか。スイス、北欧、ブルネイ それとも... そう、それとも日本だったのです。これだけの経済的規模で戦後一度も戦争をせず、平均寿命は80歳になろうというのは日本がトップだったのです。さて21世紀を迎えた今、私たちの社会はどうなのでしょう。

確かに今も日本は国際間での戦争に直接に参加はしていませんし、寿命も世界のトップレベルですが、経済もまた上向きだといわれますが、実はその当時も今も、私たちひとりひとりが「世界一平和で、長生きで、お金持ち」ということをほとんど実感できないままできているのではないのでしょうか。その大きな理由のひとつとして特に最近考えさせられることが、子どもから大人まで、「いのち」をあまりにも軽く扱ってしまう風潮が非常に強まってきていることがあります。中学生から大学生もが加害者となる殺人事件、幼い子どもたちが犠牲者となる交通死、いじめや虐待、さらに小学生を含めての自殺は年間3万人となってきたこの社会が、「世界一平和」と呼ばれるのは最大の皮肉としかいえません。このような社会的風潮のなかで、今こそ改めて「いのち」の大切さ、尊さ、かけがえのなさについて、真剣に向き合っていくことが必須の課題となっています。

この秋、関西学院大学の大学キリスト教週間は、今私たちが切実に問われている、この「いのち」について考えます。2008年には初等部（小学校）を開設し、また人間福祉学部を設置して、小学生から大学生、社会人にまでいたる教育の場としての関西学院が、神様から与えられたひとりびとりのいのちをはぐくみ、その重さを感じ取るための学園であるために、ともに考えるときとなることを願っています。特に大学生のみなさん自身が、これからの自分の人生の中で、どう皆さん自身のいのちと同時に、多くのみなさんの後に続く人たちの「いのちをはぐくむ」責任と課題を担っていくことになるのです。ぜひこのキリスト教週間を通じて、今の社会にとってもっとも大きな問いかけである「いのち」について、みなさんなりに思いを深めてください。

（宗教総主事）

命を思う

山 本 圭 子

人間を含む生物の体を構成する最も小さな単位は細胞というまとまりですが、これをさらに小さい単位に分けることができ、それが「分子」という単位です。このような分子から出来ているという点では、生物も、無生物である金属片や布切れも、同じです。

これらの分子は、生物のものであっても無生物のものであっても、共通する物理的・化学的法則に従うのですが、当然、違っている点もあります。

最も重要な違いは、生物の分子はそれぞれ特定の役割を持っており、さらに互いの役割を「知って」おり、別のところから出された命令によって仕事を分担するという相互関係を保ちながら、全体として一つの大きな仕事をしているという点です。何万という数の分子が、それぞれ別個の役割を持ち、「社会」を構成している様子は、人間の社会や生態系によく似ています。

体の中で無数の、それ自体は意思をもたないはずの分子が、日々働き続けていることを、私たちの脳が直接に感じることはありません。現代は、圧倒的に視覚優位の時代です。眠ることも休むこともせず働き続ける細胞や組織に思いを馳せることは、直接見ることができないだけに、あえてしようと思わないでしょう。しかし、生物としての私たちは、無数の細胞が、その多様な働きによって、自らの生命を支えていることを、どこかで知っているように思えます。

命をたいせつにする、とはどういうことでしょうか。自分の命をたいせつにしていますか、どのようにたいせつにしていますか、と尋ねられたら、何と答えるでしょうか。健康を維持するために食事に注意し、適度な運動を...という答えが多いかもしれません。しかし、何が健康に良いかさえ、ほとんど当てになる情報はありません。赤ワインに含まれるポリフェノールの一種が体によいという実験結果*が発表されたとたん、居酒屋でも赤ワインをオーダーする人が増えたそうですが、全ての個体に同じ効果があるのかは大いに疑問です。また、本当に良い効果だけなのか、体の中で何か悪さをしはしないか、ということも全く知られていません。では何をしても確かな効果は期待できない、何もしないでよいのか、というと、もちろんそんなことはありません。

現代人は、大脳新皮質を働かせ過ぎて、生物としての直感が弱っていると言われることがあります。「免疫系」、「細胞の寿命」、「生殖・発生・分化」などのキーワードをインターネットで検索し、軽く勉強したあと、ソファーに横になって、体の中で今も休まず行われている様々な働きに感謝する時間を持つてみることをおすすめします。生きものとしての本来の感性を取り戻す時間。なるべく脳には静かにしててもらえるよう、リラックス系のお香でも焚きながら。自分だけに聞こえる体の音を聞こうとして。自分が制御できない、見えない「自己」を思うとき、自ずと、何をすればよいのか、何をしてはいけないのかが見えてくると思います。

「生きているものは、少なくとも知っている。

自分はやがて死ぬ、ということを」(旧約聖書 コヘレトの言葉 9:5)

* Nature 2003年9月号。ポリフェノールの一種であるレスベラトロールの働きにより、ヒトの培養細胞ではX線照射後の細胞生存率が高められることを示した。

(文学部助教授)

「古い生き方」を捨てるとき

磯 貝 暁 成

新約聖書の「エフェソの信徒への手紙」の中に、次のような言葉を見つけました。
「古い生き方を捨てる」という言葉と「新しい生き方」という言葉です。

この「古い生き方を捨てる」という言葉に引かれました。

なぜ古い生き方を捨てようとするのでしょうか。

自分のこれまでの生き方がいやだからでしょうか。確かに自分のこれまでの生き方がいやだと感じている人はいます。時に感じることもあるという人なら誰もがそうかもしれませぬ。

人は何かきっかけがあって始めて真剣に、自分の生き方について考えます。

たとえば自分が原因で人との関係を壊してしまった時、深く悩んでしまいませぬか。また、自分のわがままな性格から大切な人を失ってしまい、悔やんでも悔やみきれなかったこともあったでしょう。

何かを本気になってやり始めると、これまで真剣にやってこなかった自分の不甲斐なさに愕然となりませぬか。そんな時このままではいけないと焦り、考え込みます。

このように、人は自分に対してこれでいいのか、これではいけないと考える時が時々訪れます。

時として、だれもが運命共同体の一員のように、同じスタートラインに立つことがあります。それは大学入試の日や就職試験の時などかもしれませぬ。

その時々々の区切りの時、その時を私たちは千載一遇の与えられた時として大切にしたいものです。合否や黒白いずれにしても、新しい世界が目の前に広がっているのです。

「新しい世界」に入っていくのは苦しいものです。「新しい生き方」を試みるには大きな決心がいります。

その慣れないことから、ストレスが溜まりイライラします。これでよかったのかなと悩んでしまうこともままあります。まして体の調子が悪ければなおさら気分は憂鬱です。

しかし、そのストレスから簡単に抜け出すことだけを考えないでください。

なぜ自分だけうまく行かないのかと考え込んでしまいがちですが、それでいいのです。

そのように感じた時こそ、あなたが着実に古い生き方を捨てて、新しい自分へと変わっていきつつある「しるし」なのです。

自分ひとりで戦えない時には、そのありのままの自分を友に語りなさい。

なすべきことは、高い天にあるのではないのです。身近にあるのです。明日ではなく、今日にこそ自分の新しい生き方が、悩みながら始まるのです。

関西学院の建物の屋根瓦を見て御覧なさい。

一枚一枚微妙に色が違っていています。皆さん一人ひとりが違っているのと同じです。自分の色を大切にするには、多くの違いに悩みながら、自分の色に納得していくことが必要なのです。

時は今ですよ、あなたが悩んでいる今が。

(初等部(校長)予定者)

STAND UP 世界と共に立ち上がろう

“STAND UP”とは、2006年10月15日と16日に、貧困撲滅とミレニアム開発目標の達成のために、世界中の人々が立ち上がり、その参加者数で公式ギネス世界記録を作り、貧困撲滅のメッセージを世界中に広めようという国連のキャンペーンです。関西学院でも参加できます。

と き：10月16日(月) 昼休み12:50-13:10

と ころ：西宮上ヶ原キャンパス中央芝生

内 容：お弁当を持って集合、13時10分に皆と一緒に立ち上がる

渡辺禎雄聖書型染版画展

渡辺禎雄氏は、日本独特の染色工芸の「型染」を布地だけでなく和紙にも応用し、日本古来からの民芸的技法から渡辺禎雄独自の「染色版画」を芸術的価値の高いものとして築き上げ、自由とユーモアに満ちた美術作品を制作している。氏の作品は目で見ると心で感じるとの極めて精神的な出会いをもたらし、聖書の音信を新鮮に受け止める機会を与え、国内外から高い評価を得ている。大判版画33点、小品27点、カット18点

期 間：2006年10月16日(月) 午後～19日(木) 16:00

会 場：吉岡記念館ラウンジ

主 催：吉岡記念館

問い合わせ先：吉岡記念館事務室宗教センター(0798-54-6018)

吉岡記念館オープン記念講演会

渡辺禎雄 聖書版画をめぐって

講 師：田添 禎雄(日本基督教団姫路福音教会牧師)

と き：10月19日(木) 17:00～18:20

と ころ：西宮上ヶ原ランバス記念礼拝堂

問い合わせ：吉岡記念館事務室宗教センター

聖書の植物(10) カシ

ブナ科コナラ属の樹木で、樹高が10～13mに及ぶ。旧約聖書で「カシ」の意味で使われているヘブライ語は、エーローン、アッローン、エーラー、アッラーなど多様であるが、パレスチナにはカシが数種類あり、イスラエル人はこれらの木を表すのに数種の語を使用していた。アブラハムがメソポタミアからカナンに移動し、シケムに到着したとき、モレの榿の木のところでは祭壇を築いたとあるが(創12:6-7) これはセイチガシ(Quercus calliprinos)と言われる常緑の榿の木と思われる。また、その後天幕を移して、ヘブロンにあるマムレの榿の木のところにも祭壇を築いたが(13:18) 今でもヘブロン町の外れのギリシア正教の教会の庭にセイチガシの大木が保存されていて、「アブラハムの榿の木」と呼ばれている。一本立ちのものは、聖所や墓地の目標とされた(ホセ4:13 創35:8)。材質は堅く、彫刻、船のオールなどに使用された(イザ44:14 エゼ27:6)。

花は3～4月に開花し、果実は12月頃に熟す。たくさんの雄花を尾状花序につけ、まばらに上に穂状花序についている雌花の下に垂れ下がっている。葉は卵形から長楕円形で、縁は歯状である。吉岡記念館横の「ベルスクエア」に植えられているのは、シラカシとボウガシである。